秋風の清けき夕（さやけきゆふへ）天の川舟漕（こ）ぎ渡る月人壮子（つきひとをとこ）

作者未詳（巻十・二〇四三）

やまと万葉がたり

猛暑が続いておりますが、暦の上では8月8日に立秋を迎えます。一足早く、秋の夜空を詠んだ一首をご紹介します。「天の川」とあるとおり、七夕の歌です。

今年の七夕はもう終わってしまった、と思われるかもしれませんが、国立天文台が定めた「伝統的七夕」、旧暦の7月7日は今年の8月22日にあたります。

旧暦では7～9月を「秋」としていました。『万葉集』巻十は季節ごとに分類されており、秋の部は98首もの七夕の歌から始まります。秋を詠むにあたり、七夕は紅葉に匹敵するほど好まれた題材といえます。

『万葉集』の七夕の歌にはおなじみの「彦星」や、おりひめにあたる「織女（たなばたつめ）」も登場し、天の川を渡る舟や梶（かじ）、櫂（かい）、川波などが多く詠み込まれます。

そして今回のように「月」が詠まれることもあります。現在のカレンダーでは日付と月の満ち欠けは関係しませんが、旧暦の「7日」は新月から7日目にあたり、半月になる手前の形であることが決まっています。7月7日の月は舟に見立てられ、さらにその月の舟を漕ぐ若い男性、「月人壮子」が想像されたようです。この歌以外の「月人壮子」の例も、七夕や舟に関連して用いられる傾向があります。

よく似た言い方として「月読壮子（つくよみをとこ）」もあります。「月読の光」と続く例が複数あり、明るい月を象徴して用いるようです。「月読」は『古事記』や『日本書紀』では太陽の神・アマテラスの次に誕生する月の神の名前で、月齢を数えることが語源と考えられています。

『古事記』や『日本書紀』に月の神の性別は書かれていませんが、『万葉集』ではいずれも男性と捉えられるのが興味深いところです。

秋風の清らかな、涼しい夕方が待ち遠しいですね。

（県立万葉文化館主任研究員・阪口由佳）

【訳】秋風のさやかに吹く夕、天の川に舟を漕いで渡っていく月人壮子よ。

やまと 万葉がたり

田児の浦ゆ うち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける

（山部赤人 巻三・三一八）

8月30日は富士山測候所記念日です。1895（明治28）年8月30日に、気象庁富士山測候所の前身となる建物が富士山頂に建てられたことによります。当初は気象庁の施設ではなく、気象学者の野中到が私財を投じて完成させた越冬小屋だったそうです。

高山病と栄養失調に苦しめられて断念せざるを得なかったようですが、千代子夫人とともに富士山頂で越冬しようとしたのは、高所での年中観測の必要性を感じていたからだといいます。日本最高峰である富士山ほどふさわしい場所はなかったと言えるでしょう。

富士山は古代の人々にとっても特別な山でした。「不尽の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ゆればその夜降りけり」（巻三・三二〇）という歌もあるように、一年中雪を冠した山として認識されていました。現代においては標高が高くなるにつれて気温が下がることが科学的に理解されていますが、古代の人々にとっては神秘的な現象であったと思われます。

この歌でも、そうした時季外れの雪が表現されたとみられます。雪が降り終わり積もった状態の山頂が、青空の中に照り映える様が目に浮かびます。長歌（巻三・三一七）でも、富士山の霊妙さと、それを語り伝えようという決意が詠まれており、平城京から現地に赴いた赤人の感動が伝わってくるようです。

鎌倉時代の「百人一首」にもほぼ同じ歌がありますが、「雪はふりつつ」と今現在も雪が降り続けていると表現されています。美しい描写ですが、富士山を遠望するときに雪が降り続いていたら、雪雲に覆われて山頂は見えないはずです。万葉歌が伝承される過程で、観念上の景に変容した結果と考えられます。

（県立万葉文化館企画・研究係長・井上さやか）

【訳】田児の浦を通って出て見ると、まっ白に富士の高嶺に雪が降っていたことだ。